

4 - 9 1854年の安政南海地震および1707年の宝永地震の震度分布について

Distribution of Seismic Intensity of the Great Earthquakes in 1854 and 1707

萩原尊礼
Takahiro Hagiwara

1. 本会報第3巻に1854年の安政東海地震の震度分布を掲げたが、この地震の32時間後に続いて発生した安政南海地震の震度分布を作ってみた。資料は前回と同じく武者金吉著「日本地震史料」によった。安政南海地震は、1854年11月5日17時頃起り、五畿七道にわたり地大いに震い、土佐、阿波の両国および紀伊国南西部の被害が特に大きかった。津波は房総半島の沿岸から九州東岸に及び、特に紀伊の西岸および土佐湾の沿岸が大きく、大阪湾に進入して大きな被害を生じた。震災地を通じて家屋の倒壊10,000、焼失6,000、流失15,000、死者3,000となっている。東南海地震に引き続いて起ったため、史料の上ではどちらの地震による被害か明瞭ではないものがあるが、これらを除いて南海地震によると判定できるものだけを取り出して震度を定めた（第1図）。

2. 1707年10月28日（宝永4年10月4日）に起ったいわゆる宝永地震は、五畿七道にわたり地大いに震い、津波は九州の南東部から伊豆に至るまでの沿岸を襲った。震災地を通じて潰家29,000、死者4,900に及んだとされている。文部省震災予防評議会発行（昭和18年）「増訂大日本地震史料」によって、この地震の震度分布を作ったのが第2図である。この地震は被害面積が広さから言うと日本の地震史上第1であり、以前から東海地震（遠州灘の地震）と南海地震（紀伊半島・四国沖の地震）とが同時に起ったのではないかと言われてきた。今回作った震度分布図を安政の東海地震、南海地震の震度分布図と比べてみると、まさにその通りである。既に「理科年表」に記載されているように、室戸、串本、御前崎で土地隆起があり、高知市の東で土地沈下があったことを見ても、東海地震と南海地震が一諸に起ったことになるが、今回資料を読んで、身延山付近の富士川べりに山崩れ（白鳥山らしい）があり、3日間川をせき止めたという記事があることに気付き、これも安政東海地震の場合にそっくりだと思った。安政の場合は2つの地震が32時間の間を置いて起っているのに、宝永の場合も2つの地震が何時間か間を置いて起ったのではないかと考えられる。そこで、そのような証拠が何かないと史料を読んでみたが、地震についても津波についても、それを示すような記事は何も見つけ出すことはできなかった。

参考のために、1361年の正平地震、1498年の明応地震、1605年の慶長地震などの簡略

な震度分布図を第3図に掲げ、これらの地震の震度分布が一目で比較できるようにした。

最近、西南日本太平洋岸の巨大地震の断層模型の研究が活発だが、ここに掲げた震度分布図がこれらの研究に参考になれば幸である。



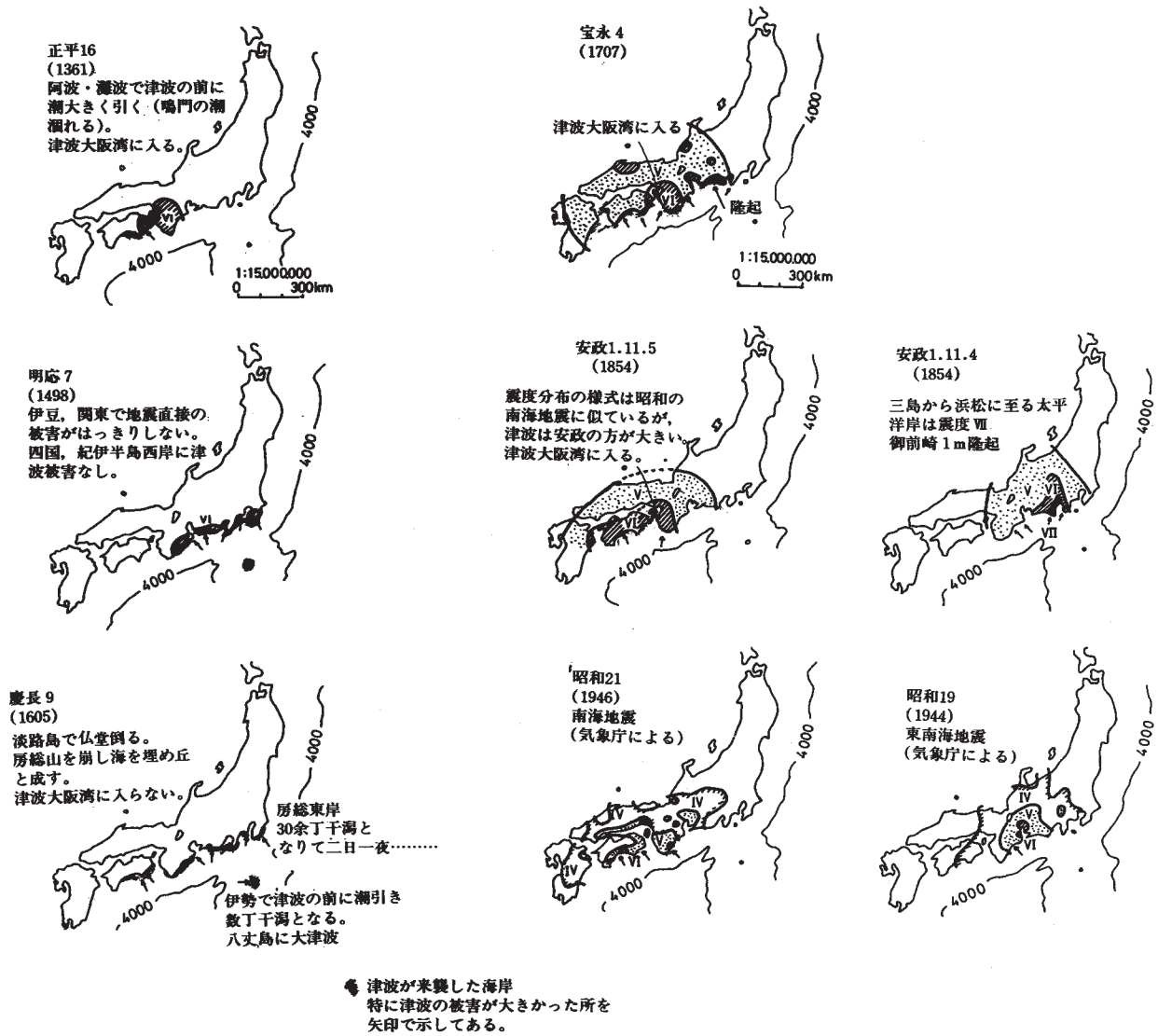
第1図 1854年安政南海地震の震度分布

Fig. 1 Distribution of seismic intensity of the Nankai earthquake in 1854



第2図 1707年宝永地震の震度分布

Fig. 2 Distribution of seismic intensity of the Hoei earthquake in 1707



第3図 西南日本太平洋岸に起った巨大地震の震度分布

Fig. 3 Distribution of seismic intensity of the great earthquakes occurred in the Pacific off the southwestern part of Japan